

Title	D. トモルトゴー著・小沢重男・蓮見治雄編・訳『現代蒙英日辞典』に見られるモンゴル語表記法
Author(s)	角道, 正佳
Citation	大阪外国語大学学報. 62 p.17-p.35
Issue Date	1983-03-24
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80950
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

D. トモルトゴ著・小沢重男・蓮見治雄編・訳
『現代蒙英日辞典』に見られるモンゴル語表記法

角 道 正 佳

The Orthography of Mongolian of
A Modern Mongolian-English-Japanese Dictionary

KAKUDO Masayoshi

Khalkha Mongolian (or Standard Mongolian) spoken in the Mongolian People's Republic has orthography based on the pronunciation of present-day Mongolian. However, *A Mongolian-English-Japanese Dictionary* published recently adopts a unique orthography which differs from the standard orthography. The purpose of this paper is to show the difference between these two orthographies and analyse the mechanism of the spelling on which the author of this dictionary based. The main difference is that the orthography of this dictionary lacks word internal vowel deletion except for the limited cases. This is because the author tried to show clearly the word structure of Mongolian, which is also reflected in the И-Ь alternation. Sometimes there are too many vowels written in his orthography. The reason is that he still clings to the old orthography. As a result, even homonyms such as 'palm' and 'does not exist' must be distinguished in his orthography as аяара and аяга.

0. はじめに

モンゴル人民共和国の標準語であるモンゴル語（ハルハ方言）は、現代式の正書法がすでに確立している言語であり、現在出版物はこの正書法に基づいてなされている。正書法というものの性質上、二通り以上の表記が共存している語があったり¹、なかには間違っ綴られたものが活字になっていたりするような事情は避けられないが、とにかく独自の正書法が存在する。辞書の表記についても、勿論、この正書法に基づいて書かれるのが普通である²。ところが最近、この正書法に基づかない表記体系によって記された辞書『現代蒙英日辞典』が刊行された。この辞書は、見出し語は少ないけれども、記述の面で、それまでの辞書になかったような特徴もっているもので、現在モンゴル語を学習するに際しては、必要不可欠のものであるといえよう。モンゴル語を何年も学習している者、とりわけモンゴル文語にも親しんでいる者が、この辞書を使いこなすことはさほど困難なことではないように思われるけれども、初心者がいきなりこの辞書をひこうとすると、探している語が見つからないことがしばしばあるように思われる。そのために正規の正書法との対照表が付いている。しかし著者が、いったい、どういう方針でこのような表記を採用することにしたのかという点³、さらに、この表記体系自体の構造については詳しくは述べられていない。ここでは、その方針はともかく、構造にメスを入れてみようと思う。つまり、この表記

体系が望ましいものであるか否かという点にはあまり触れないで、構造がどうなっているかという点だけに注目して、この表記をながめてみることにする。

子音の表記や、母音調和については、正規の正書法と変わるところがないので、表記で問題になるのは音節構造、すなわち、あいまい母音の位置である。つまり、正規の正書法とは違った位置に母音があったり、母音が多かったりするのがこの表記の特徴である。さらに、иとьの書き分けの方法が正規のものとは異なっている。

モンゴル語は、ブリヤート方言やオルドス方言と違って閉音節志向の言語であり、それは正書法からもうかがわれる。もっともモンゴル語は必ずしも閉音節志向ではないという見方もある。Poppe (1951, 1970), Sanzheyev (1973) に従うと⁴、現代モンゴル語は、語中で子音が三つ続くことや語末で子音が二つ並ぶことはないことになる。Төмөртоогооの表記は、これらとも違っている。実際、語中で子音が三つ続くものや語末で子音が二つ並ぶものが存在する。それにもかかわらず正規の正書法よりは母音が多く書かれるという特徴がある。

Төмөртоогоо (以下 T) は、この辞書の刊行以前に、彼独自の表記法に基づいて書いた論文 (1977) がある。この論文にみられる表記と、今問題にしている辞書 (1979) の表記との間には多少の相違点がみられる⁵。

T (1977) ページ	T (1979)	
урьд 349	урид	以前に
хувьсгалын 349	хувисгалын	革命の
зэргэцэх 352	зэрэгц-	匹敵する
ихэнхи 351	ихэнх	殆どの
идэвхитэй 365	ихэвхтэй	能動的な

T (1977) の урьд, хувьсгалын は正規の正書法と同じであるが、T (1979) と比べると違っている。語幹内の母音が消去されないという点で T (1977) と T (1979) とには共通点がある。T (1977) から例をひろってみよう。

T (1977) ページ	
үүрэгээр 347	役割りによって
учираас 347	～ので
хөгжилын 347	発達の
үндэсэн 347	基礎の
хувьсалын 347	変化の
байсаныг 347	～であったことを
бичигийн 347	文字の
бүтэцэнд 356	構造に
уламжилан 363	続けて
судалахад 366	研究するのに

これらの語は、下線の母音が消去されないで残っているという特徴がある。次の二語は、正規の

正書法とも同じであるが、格語尾に **н** が出現する語は、**н** の前にあいまい母音が現れないという点で、**T** (1979) と共通の特徴といえる。

T (1977) ページ

эртний 347	昔の
хэлний 347	ことばの

すなわち **эртэний**, **хэлэний** ではないという点が **Yүрэгээр** 以下の語との違いであり、しかも **T** (1977) と **T** (1979) とが共通の特徴をもっている語である。

T (1977) には、複合語を分かち書きしないものが見られるが、この点も **T** (1979) との共通点である⁶。

T (1977) ページ

үйлүгийн 349	動詞の
утгазүйи 349	意味論の
тийнлгалаар 355	格変化によって

1. Төмөртгоо の表記と正規の正書法

1. 1. 共通点

正規の正書法（以下**З**）と比べてみた際、どの点が違っているかを明らかにする前に、どの点が共通であるかを明らかにしておく必要がある。以下共通点について述べる。

1. 1. 1. 子音

子音については、両者に違いはみられない。たとえば、「呼吸」は **T** では **амисгал** であり、**З** では **амьсгал** であるから **и** と **ь** の違いはあるが、**м**, **с**, **г**, **л** という子音の音価については両者共、同じである。ここで特に重要なのは、**З** の **г** という子音がブリヤート方言の正書法 **амисхал** にみられるように **х** ではなく、**T** でも **г** であるという点である。また、「心」は両者共 **сэтгэл** である⁷。「呼吸」は文語の **amisqal**、「心」は **sedkil** に対応する語であるから、**г** は古くは無声子音であったと考えられるし、**сэтгэл** の **т** は古くは有声子音であったと考えられる。一般に文語の **sk**, **sq**; **dk**, **dq** は、ハルハ方言で **сг**; **тг** に対応するから、この点 **T** と **З** とは同じ立場で表記していることになる。

1. 1. 2. б ~ в 交替

З では、語頭及び **л**, **м**, **н**, **в** の直後で **б** をそれ以外の位置で **в** を書くという規則があり、この点 **T** も同じ立場を採っているものと思われる⁸。たとえば、**баатар** 「英雄」、**салбар** 「分科」、**самбар** 「枝」、**өвөл** 「冬」。しかし、次のように **T** と **З** とが違う語がある⁹。

T	З	
а <u>б</u> ьяаслаг	а <u>в</u> ьяаслаг	才能のある

ча <u>б</u> ганц	чав <u>г</u> анц	老婆
а <u>б</u> рага	ав <u>р</u> ага	巨大な
баа <u>б</u> гайчил-	баав <u>г</u> айчил-	力で圧倒する
шир <u>б</u> э-	шир <u>в</u> э-	むちで打つ
ь <u>а</u> йр	б <u>а</u> йр	場所

ьайр「場所」は明らかに誤植であろう。баабгайчил-「～を力で圧倒する」は、баавгай「熊」の派生語であることを考えると、やはり баавгайчил- の誤記だと思われる。他の語については確かな証拠はないけれども、чабганц「老婆」と авгай「妻」とで г の前の子音に発音の差があるとは思われないし、ширбэ-「むちで打つ」と арван「十」とで р の後の子音に発音上の差があるとは思われない¹⁰から誤記の可能性がありそうである。

1. 1. 3. あいまい母音の表記

あいまい母音として、どの母音を書くかは Т も З も全く同じである。a 及び y を含んだ音節の次では a を、o を含んだ音節の次では o を、э 及び y を含んだ音節の次では э を、θ を含んだ音節の次では θ を書く。語中で и を含んだ音節があれば、その音節を飛び越えて上に述べた規則が適用される。複合語については上の規則に従わない。

1. 1. 4. ж, ч, ш の後のあいまい母音

ж, ч, ш の直後のあいまい母音は и と書き、この и は ь とは交替しないで、ゼロと交替するという点で Т は З と同じである¹¹。

1. 1. 5. 語末（語幹末）のあいまい母音

	Т	З	
A	алба	алба	任務
	мөнгө	мөнгө	銀
B	энэ	энэ	これ
	бага	бага	小さい
C	салхи	салхи	風
	анги	анги	学年
D	ханга-	ханга-	満足する
	итгэ-	итгэ-	信じる
	сана-	сана-	思う
	тогло-	тогло-	遊ぶ

A は 7 子音が語末で二つ並ぶことができないために母音が必要になっている例である¹²。B は、「区別する母音」の例である。C, D については Т と З とで綴り方が違う場合もある。この点については後でまた述べる¹³。

1. 1. 6. 補助母音

я, ё, е, ю の書き方については両者同じである。

1. 1. 7. и + VV

иもしくはьで終わっている語に、長母音で始まる接辞を添加する際の書き方は、両者共同である。たとえば、**яриа** 「会話」、**зохиол** 「作品」¹⁴。

1. 1. 8. 母音挿入

母音挿入のしかたも両者同じである¹⁵。

ТОХ-	+ М	→	ТОХ <u>О</u> М	フェルト製の鞍褥
装備する				
ДҮҮР-	+ Н	→	ДҮҮР <u>Э</u> Н	満ちた
一杯になる				
ИХ	+ РХҮҮ	→	ИХ <u>Э</u> РХҮҮ	尊大な
大きい				

1. 1. 9. ст, сч, хт, хч

сとхの後にтとчが来る場合、すなわちст, сч, хт, хчは母音なしに書かれる。たとえば, түүхт 「歴史の」、түүхч 「歴史家」、уст- 「全滅する」。

1. 1. 10. 形動詞 х の前の母音

Зでは、形動詞 х の前の母音は、長母音や二重母音で始まる接辞、あるいは挿入された母音の前でも脱落しない。この点 Т でも同じである。たとえば аль болохоор оруулахыг 「なんとかして入れよう」と。さらに、次のような語についても З と Т では共通点がある。

Т	З	
мэдэр <u>э</u> хүй	мэдэр <u>э</u> хүй	知覚
ухагда <u>а</u> хуун	ухагда <u>а</u> хуун	概念
үгүүл <u>э</u> хүүн	үгүүл <u>э</u> хүүн	述語
үгүүлэгд <u>э</u> хүүн	үгүүлэгд <u>э</u> хүүн	主語

1. 2. 相違点

1. 2. 1. 母音消去の不在

相違点を一言でいえば、音節構造の違いということになる。母音挿入のしかたは同じであるから、違うのは最初から(基底形に)母音を書く位置と母音消去のしかたということになる¹⁶。Зには存在する母音消去が Т には存在しないと考えると説明のつく語が数多くみられる¹⁷。

Т	З	
хоцорогд-	хоцрогд-	遅れる
боолчилогд-	боолчлогд-	奴隷化される
судалал	судлал	研究
араваад	арваад	10ずつ

хоцорогд-「遅れる」は、хоцор-「あとになる」に гд-〈受身〉が付いたために г の前に母音が挿入されて、хоцорогд-となったものである。Зでは、р の前の母音が消去されるが、Т では残っ

ているという違いがある。残りの例も、**боолчил + л** , **судал + л** , **арав + аад** であるから、もともとあった母音は、新たに挿入された母音や長母音の前でも消去されない。

この規則は、格語尾が付加された場合にもあてはまる。序文の中に例が数多く見られる。

Т	З	
эрдэмтэд + ийн	эрдэмтд + ийн	学者達の
бичиг + ээр	бичг + ээр	文字によって
засаг + ийн	засг + ийн	政府の
хөгжил + ийн	хөгжл + ийн	発達の
судалагчид + аас	судлагчд + аас	研究者達から
улам + аар	удм + аар	さらに
талархал + аа	талархл + аа	感謝を
эцэс + ийн	эцс + ийн	最後の
үндэс + ээр	үндс + ээр	に基づいて
үсэг + тйн	үсг + ийн	文字の
дүрэм + ээс	дүрм + ээс	規則より

долигоно 「へつらう」、долигонуур 「(形) へつらう」という例を見るとわかるように、語幹末の母音は、**З**と同じように長母音の前で消去される。

1. 2. 2. 出名動詞作成の接辞 л の前の母音

出名動詞作成の接辞 **л** の前のあいまい母音は、以上の規則に従わないで、長母音で始まる接辞、語尾及び挿入された母音の前で消去される。

Т	З	
хэрэг + эл-	хэрэг + лэ-	使う
хэрэг + л + үүр	хэрэг + л + үүр	方法
хэрэг + л + эгд-	хэрэг + л + эгд-	使われる
хэрэг + л + эл	хэрэг + лэ + л	用具
хэрэг + л + эгч	хэрэг + лэ + гч	使用者
эз + эл-	эз + эл-	占領する (語幹)
эз + л + эх	эз + л + эх	占領する (形動詞)
эх + л + эн	эз + л + эн	占領する (副動詞)
үндэс + эл-	үндэс + лэ-	基づく
үндэс + л + эл	үндэс + лэ + л	基礎
товч + ил-	товч + ил-	要約する
товч + л + ол	товч + о + ол	要約

1. 2. 3. 出名動詞作成の接辞 л

Зでは、出名動詞作成の接辞 **л** は三通りの書き方がある。

接辞 語幹末の形 例

л	V	тоо + л-	数える
лV	C ⁷	хэрэг + лэ-	使う
	(C)VCCV(C ⁷)C ⁹	үнлэс + лэ-	基づく
Vл	(C ⁷)C ⁹	нарийвч + ил-	詳細に見る
		ус + ал-	水をやる

この規則は тогло- 「遊ぶ」、хэвлэ- 「印刷する」、хөдөл- 「動く」などからわかるように、出名動詞でないものにもあてはまるようである。T では л の書き方は二通りしかなく、л が付いたものはすべて子音語幹である。

接辞	語幹末の形	例	
л	V	тоо + л-	数える
Vл	C	хэрэг + эл-	使う
		үндэс + эл-	基づく
		ус + ал-	水をやる

この例外が, гэр + лэ- 「結婚する」である。「遊ぶ」は T でも тогло- と綴られるが, これは, 1. 1. 5 の D で述べたように, 単に母音語幹の動詞と考えればよいと思われる。しかし, хөдөл- 「動く」、хэвлэ- 「印刷する」が子音語幹の動詞であり, 同じ л で終わる тогло- 「遊ぶ」がなぜ母音語幹になっているのかは, よくわからない。

1. 2. 4. н を持った格語尾

格語尾に н が現れる場合, н の直前にはあいまい母音は現れない。бид「我々」、эрт「昔」の属格は, бидэний, эртэний ではなく, бидний, эртний である。これは, 結果的には 3 と同じことになるけれども, 1. 2. 1 の規則の適用を受けないという点で, 特にここに明記しておく必要がある。もっとも, бид + н + ий と分析するから, 1. 2. 1 の例外になるので, бид + ний と分析すれば, 1. 2. 1 の例外にはならないことになる¹⁸。

1. 2. 5. 出勤名詞作成の接辞-лага, -лого

3 では, 語幹末が子音であるか母音であるかによって, г の前に母音があるのとないのとの二種類の型が存在するが, T では г の前に母音がある型しかない。

T	3	
A дууд + лага	дууд + лага	発音
унш + лага	унш + лага	読書
бод + лого	бод + лого	考え
B барь + лага	бари + лга	建築
хаа + лага	хаа + лга	ドア
уна + лага	уна + лга	輸送手段

なお, 女性語に付く場合は, T, 3 共に一種類の型しかない。

T	3	
мэд + лэг	мэд + лэг	知識
дэмж + лэг	дэмж + лэг	支持

ЭМНЭ + ЛЭГ	ЭМНЭ + ЛЭГ	病院
өг + лөг	өг + лөг	布施

3 の二種類の異形態のうち -лга, -лого のほうが通時的には古い形であり, 文語の -lγa に対応する。

文語	3	T
-lγa	-лга, -лого	—
	-лага, -лого	-лага, -лого
-lge	—	—
	-лэг, -лег	-лэг, -лег

1. 2. 6. 口蓋垂音 r の前の母音の有無

3 では, 口蓋垂音 r の前に, 共時的に見て子音が一つしかなければ, r の前には母音は書かれないが, T では, 母音が書かれる場合と書かれない場合とがある。

	T	3	文語	
A	ав <u>а</u> га	авга	abaγ-a	父方の伯(叔)父
	ал <u>а</u> га	алга	alaγ-a	手のひら
	ят <u>а</u> га	ятга	yatuγ-a	ハーブ
B	алга	алга	alγ-a	ない
	ятга-	ятга-	idqa-	説得する
	утга	утга	udq-a	意味

文語と比べれば明らかなように, T は文語の音節構造をそのまま受け継いでいるわけである¹⁹。

1. 2. 7. 歯茎音 н の前の母音の有無

3 では, 歯茎音 н の前に子音が一つしかなければ, н の前には, 母音は書かれないが, T では, 母音が書かれる場合と, 書かれない場合とがある。

	T	3	文語	
A	өмө <u>н</u> ө	өмнө	emün-e	南
	дор <u>о</u> но	дорно	doron-a	東
	өрө <u>н</u> ө	өрнө	örön-e	西
	огот <u>о</u> но	оготно	oγoton-a	野ネズミ
B	самна-	самна-	samna-	くしけずる

この場合も T は文語の音節構造を保存しているといえる。3 でも, багана 「柱」のように н の前に母音がある例があるが, これは区別する母音である²⁰。

歯茎音 н の前に子音が二つある場合は, T も 3 も н の前に母音がある。

	T	3	文語	
	эрдэ <u>н</u> э	эрдэнэ	erdeni	宝物

1. 2. 8. 語末の 7 子音 + 9 子音

3 では語末(語幹末)で 7 子音と 9 子音がこの順に並ぶ時, 母音は必要としないが, T では, 母音がある場合とない場合とがある。

	Т	З	文語	
A	давас	давс	dabusun	塩
	сувад	сувд	subud	真珠
	бүгэд	бүгд	bügüide	すべて
	төвөд	төвд	töbed	チベット
	эгэч	эгч	egeči	姉
	өмөс-	өмс-	emüs-	着る
	зүрэх	зүрх	ǰirüken	心臓
B	бэрх	бэрх	berke	困難な
	хямд	хямд	kimda	容易な
	хүнд	хүнд	kündü	困難な
	аарц	аарц	aγarčan	酪
	авагч	авагч	abuγči	取る人
	авс	авс	absan	棺
	агт	агт	aγta	去勢馬
C	ойрд	ойрд	oyirad	オイラート
	ард	ард	arad	人民
	үүрд	үүрд	egüride	永遠に
	сонс-	сонс-	sonos-	聞く
	өнчин	өнчин	önöčin	孤児
D	нарас	нарс	narasun	松
	улас	улс	ulus	国
E	өвд-	өвд-	ebed-	病む

Тで母音がある場合(A)は、文語でもその位置に母音がある。また、文語で母音がない場合(B)は、Тでも母音がない。しかし、Тで母音がなくて文語では母音がある場合(C)もある。一般に、舌先を使う子音が並んでいる場合、その間の母音はТでは存在しないということができる。Cはそういう場合である。しかし、この条件にあてはまるのに母音が存在する場合(D)及び、この条件にあてはまらないのに母音が存在しない場合(E)もある。

1. 2. 9. и の位置

Зでは、二つの子音が口蓋化される場合、二つめの子音の後に и を書くという規則がある²¹。Тでは、二つめの子音の前に書く場合と後に書く場合とがある。

	Т	З	文語	
A	арих	архи	ariki	酒
	тарих	тархи	tariki	頭脳
	тамах	тамхи	tamaki	タバコ
B	салхи	салхи	salki	風
	анги	анги	anggi	学年

文語で、二つの子音の間に母音 (i とは限らない) があれば A、なければ B のようになる。

1. 2. 10. иの有無

Зではиがあるのに、Тではない場合がある。

Т	З	
олонх	олонхи	大多数
хоторх	доторхи	中にある

1. 2. 11. и～ь交替

Зでьを書くのは、(i) 7子音と9子音の間、(ii) 単独の軟音化子音と志向形я, ёの間、(iii) 単独の子音と+гүй, +тайの間、及び(iv) 単独の子音と語境界の間である。たとえば, арьс「皮ふ」, барья「建てよう」, хоньгүй「羊がいない」, хоньтой「羊のいる」, хонь「羊」。この規則のうち(i)は, арьсのように語末だけでなく, арьстан「人種」のように語中でもあてはまる。以上のどれにも該当しなければ, иを書く。

Тにおけるиとьの書き分け方は, 大変複雑である。次の各場合に分けてみていくことにする。

a. C ⁷ __C ⁷ C#	k. C ⁷ __C ⁷ C(C)V
b. C ⁷ __C ⁹ C#	l. C ⁷ __C ⁹ C(C)V
c. C ⁹ __C ⁷ C#	m. C ⁹ __C ⁷ C(C)V
d. C ⁹ __C ⁹ C#	n. C ⁹ __C ⁹ C(C)V
e. C ⁷ __C ⁷ #	o. C ⁷ __C ⁷ V
f. C ⁷ __C ⁹ #	p. C ⁷ __C ⁹ V
g. C ⁹ __C ⁷ #	q. C ⁹ __C ⁷ V
h. C ⁹ __C ⁹ #	r. C ⁹ __C ⁹ V

i. VCC__#

j. V C__#

a～d. C__CC#

この位置ではиしか現れない。

алирс	こけもも	салхивч	通風窓
орхимж	袈裟	нахилз-	あちこちへ曲がる

e. C⁷__C⁷#

この位置ではиしか現れない。

халим	鯨	алим	りんご
анир	騒音	авир	性質
авир-	登る	ярвиг	困難

f. C⁷__C⁹#

この位置ではиもьも現れる。

А	арис	皮膚	шавиж	昆虫
	халис	皮	ангид	ことなった

	салангид	別れて		
B	арих	酒	гарих	頭脳
	тамих	タバコ		
C	хальт	すばやく	хавьт-	近づく
	тольд-	鏡にうつして見る	дуурьс-	有名になる
	горьд-	希望する		

Bは1. 2. 9. のAの例と同じものである。Cに該当するもののうちのあるものは、ьの直後に形態素境界があるけれども、すべてがそうではない。

g. C⁹__C⁷#

この位置ではиしか現れない。

гантиг	大理石	аахил-	あえぐ
далдир-	とっさに身をかわす		

h. C⁷__C⁹#

この位置ではиしか現れない。

бодис	物質	бодит	物質的な
увдис	魔法	адис	祝福
охид	Охин「娘」の複数		

i. V C C __#

1. 2. 9のBに述べたような例がある。

салхи	風	анги	学年
-------	---	------	----

j. V C __#

この位置ではьしか現れない。

толь	鏡	хонь	羊
боть	巻	бохь	チューインガム
агь	よもぎ	хувь	個人

k. C⁷__C⁷C(C)V

形態素境界がどこにあるかによって、三つの場合に分けて考えることにする。

(i) C⁷__+C⁷C(C)V

тани + рхуу	愛想のよい	сонц + рхол	興味
-------------	-------	-------------	----

(ii) C⁷__C⁷+C(C)V

зарим + даа	時々	тамир + чин	スポーツマン
-------------	----	-------------	--------

(iii) C⁷__C⁷C+(C)V

該当例なし

l. C⁷__C⁹C(C)V

やはり、三つの場合に分けてみることにする。

(i) C⁷__+C⁹C(C)V

A	арви + тго-	ふやす
---	-------------	-----

B	горь + длого	希望
---	--------------	----

(ii) C⁷__C⁹+C(C)V

арис + тан	人種	арих + чин	酒のみ
------------	----	------------	-----

- урид + чил- 優先する
(iii) C⁷__C⁹C + (C) V
該当例なし
- m. C⁹__C⁷C (C) V
三つの場合に分けて考えることにする。
(i) C⁹__ + C⁷C (C) V
нанди + гна- 尊重する талхи + гдал 圧迫
(ii) C⁹__C⁷ + C (C) V
該当例なし
(iii) C⁹__C⁷C + (C) V
удирд + лага 指導
- n. C⁹__C⁹C (C) V
該当例なし
以下形態素境界の位置によって各々二つの場合に分けて考えることにする。
- o. C⁷__C⁷V
(i) C⁷__ + C⁷V
A. анги + лал 分類 ани + валз くり返し目をパチパチする
они + гор 細い目をした
B. холъ + мог 混合 таръ + мал 植えられた
уръ + лага 招待 горъ + логч 学位希望者
(ii) C⁷__C⁷ + V
онгир + оо いばった залбир + ал 礼り
улир + ал 季節 авир + ал- ふるまう
томил + ол 指名
- p. C⁷__C⁹V
(i) C⁷__ + C⁹V
уръ + тал 以前あった状態 амъ + тан 動物
хавъ + цаа 近くに хавъ + туул- 近づかせる
туулъ + чин 叙事詩の語り手
(ii) C⁷__C⁹ + V
урих + ад わなで捕える харис + ал- 皮をむく
- q. C⁹__C⁷V
(i) C⁹__ + C⁷V
A. ати + гар 縮んだ
B. тахъ + лага 犠牲
(iii) C⁹__C⁷ + V
атир + аа しわ хохир + ол 損害
тохир + омж 適応 захир + ал 学長
захир + амж 指示
- r. C⁹__C⁹V

(i) $C^9_ + C^9V$

захъ + дал 手紙

(ii) $C^9_ C^9 + V$

A. адис + ал- 祝福する

B. зохиц + ол 一致 зохьц + уул- 一致させる

以上をまとめると、次のようになる。

a.	$\left\{ \begin{array}{c} \text{C} \\ \text{C} \\ \text{C} \\ \text{C} \end{array} \right.$ и $\text{CC}\#$	k.	C^7	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	$C^7C(C)V$						
b.		l.	C^7	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	$C^9C(C)V$						
c.		m.	C^9	и	$C^7C(C)V$						
d.		n.	該当例なし								
e.	C^7	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{и} \end{array} \right\}$	$C^7\#$	o.	C^7	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	$+C^7V$	C^7	и	C^7+V	(i)
f.	C^7	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	$C^9\#$	p.	C^7	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	$+C^9V$	C^7	и	C^9+V	(ii)
g.	C^9	и	$C^7\#$	q.	C^9	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	$+C^7V$	C^9	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	C^7+V	
h.	C^9	и	$C^9\#$	r.	C^9	б	$-C^9V$	C^9	$\left\{ \begin{array}{c} \text{и} \\ \text{б} \end{array} \right\}$	C^9+V	
i.	VCC	и	$\#$								
j.	VC	б	$\#$								

多少の例外はあるが、大体は次のようになっているものと思われる。

- (1) 語末の単子音の後は б (j)
- (2) 語末の複子音の後は и (i)
- (3) 語末の子音の前では и (a ~ h)

例外 f の C のうちの хальт 「すばやく」 など

- (4) 語中の複子音の前では и (k ~ m)

例外 горьдлого 「希望」²²

- (5) 語中の単子音の前では (o ~ r)

(i) 形態素境界が $_C + V$ なら и

例外 зохьц + ог 「一致」

зохьц + уул- 「一致させる」

(ii) 形態素境界が $_ + C V$ なら б

例外 ани + валз- 「くり返し目をパチパチする」

они + гор 「細い目をした」

ати + гар 「縮んだ」

анги + лал 「分類」²³

1. 2. 11. б

3 では男性の子音語幹動詞において志向形 я, ё の前に б が用いられ、語中で用いられるのは товъёг 「目録, 索引」ぐらいに限られている。

3 では女性語の子音語幹動詞と志向形 e の間には б の代わりに в が用いられる。T では、序文

にдэвшүүлэ「述べよう」という例があることから判断して、子音語幹動詞と志向形の間には母音が挿入されるようである。

2. 共時的にみた Төмөртөгөөの表記体系

3では、7子音と9子音という子音の分類が、あいまい母音の位置を決定する重要な役割りを果たしているのであるが、Tの表記体系において、7子音、9子音という分類は、いったいどういう意味を持つのであろうか。あるいは7子音、9子音といった分類ではなく、もっと違った分類が必要になるのであろうか。まずこの点から見ていくことにしよう。

3では、「7子音は前か後に必ず母音を持っていなければならない」という規則がある。この規則に関する限りTの表記も全く同じことがいえる。しかし、3の「7子音は前と後に両方に母音を持っている必要はない」という規則は、Tの表記にはあてはまらない。たとえば、судалал「研究」、авага「父方の伯（叔）父」の下線の子音は、前後両方にあいまい母音を持っている。また、бичигээр「文字によって」、дүрэмээс「規則から」、нарас「松」、удас「国」などの7子音も前後に母音を持っている。судалал, бичигээр, дүрэмээсは、судал+л, бичиг+ээр, дүрэм+ээсというように分解できるから、語尾を取り去った形についていえば、上述の「7子音は前か後に必ず母音を持っていなければならない」という規則を満足している。したがって、「語尾が付加されたために余分になった母音は消去しない」という規則が働いているようにおもわれる。ところが、хэрэглүүр「方法」、эзлэн「占領して」について考えてみると、上の規則があてはまらないことがわかる。なぜなら、хэрэглүүрは、хэрэг+л+үүрであるから хэрэглүүр となってよいはずであるし、эзлэнは эз+л+н (эзэн+л+н) であるから эзэлэн となってもいいはずであるのに母音が落ちているからである。母音が落ちるのは、лが出名動詞作成接辞の場合に限られているようである。

ところで、нарас, удасなどについては、どう考えるとよいのであろうか。これらは「語末で7子音+9子音は母音が要らない」という3の規則にもあっていない。上述の語に対して、бэрх「困難な」、агт「去勢馬」のような語があるので、上の規則にあっている語もあるわけである。ここで7子音を、後に必ず母音を伴っている7子音（以下C⁷）とそうでない7子音（以下C⁷）という二つのクラスに分けてみることにする。

судалалという語のлは、後に母音を伴っているが、これは судал+л であるから、常に後に母音を伴っているわけではない。したがってC⁷である。нарасのрは常に後に母音を伴っているからC⁷である。удам「さらに」のлは、常に後に母音を伴っているけれども、この母音はмが必要としていると解釈できるのでлはC⁷である。ここで、C⁷を大文字で書くと次のようになる。

T	C ⁷	を大文字で表した表記
судалал	судалал	研究

нарас	наРас	松
улам	улам	さらに
авага	аВаГа	父方の伯（叔）父
бэрх	бэрх	困難な
агт	агт	去勢馬
алага	аЛаГа	手のひら
алга	алГа	ない
уналага	уНаЛаГа	輸送
өмөнө	өМөНө	南

問題は、C'がいったいどういう位置に出現するのかということである。ГとНについては、他の情報からは予知できない。これらの子音の後にある母音は、3の「区別する母音」に対応する。Г、Нのすぐ前でC'とC'とが対立する。

C' аЛаГа 手のひら	C' алГа ない
өМөНө 南	самНа- くしける

9 子音の前でも C' と C' とが対立する。

C' зүРэх 心臓	C' бэрх 困難な
эгэч 姉	авагч 取る人
давас 塩	авс 棺

3. 通時的に見た Төмөртөгөө の表記体系

区別する母音、語末母音、иなどを除いたあいまい母音の位置を文語の母音の位置と比べてみると、どういう関係になっているであろうか。文語とはいっても、γ、gの脱落、iの折れなどがすでに起ってしまっている場合について考えてみることにする。文語の音節構造を便宜上、次の場合に分けてみることにする。

	開音節	閉音節
開音節	語末 (1) a V C' V #	(3) a V C C' V #
	(1) b V C' V #	(3) b V C C' V #
	語中 (2) a V C' V C V	(4) a V C C' V C V
	(2) b V C' V C V	(4) b V C C' V C V
閉音節	語末 (5) V C' V C' #	
	語中 (6) V C' V C' C V	

文語	T	3	
(1) a am <u>a</u>	ам	ам	口
sar <u>a</u>	сар	сар	月
ter <u>e</u>	тэр	тэр	それ
en <u>e</u>	энэ	энэ	これ
baγ <u>a</u>	бага	бага	小さい

音が、口蓋垂音 γ , 舌先音 n , 9 子音の前で保存されているという点が 3 と違う点である。しかし、音声的には алага 「手のひら」と алга 「ない」とを書き分けなければならないような理由はないと思われる。

最後に、例外について述べておきたい。 тээрэмл 「粉をひく」、 угсарлт 「組み立て操作」、 томрх 「誇る」などは、母音が 3 より少ない例である。T の方針に従うなら、 тээрэмэл -, угсаралт , томорх - となるべきであるのにそうっていない。また гэрлэ 「結婚する」は T の方針に従うと、 гэрэл - となるはずである。さらに、 нарас 「松」、 улас 「国」の下線の母音は、T の方針に従うと不要であるはずのものである。こういった語は、発音に忠実に綴られていると T は主張されるのかもしれないが筆者にはその理由は理解できない。

注

1. $\text{нулимс} \sim \text{нулимас}$ 「涙」、 $\text{нөхөртэйгөө} \sim \text{нөхөртэйгээ}$ 「自分の同志と共に」など。
2. 動詞は、通常、形動詞 x が付いた形が載っている。 Төмөргогоо の辞書には、語幹が載っているといった違いもある。
3. 辞書を使用する際の注意のところに、「モンゴル語の構造及び発音をできる限り正確に表すために、モンゴル人民共和国で現在使用されている正書法には従わない語がたくさんある」という意味のことが書かれている。
4. Porpe (1970: 54) には、 $V \left\{ \begin{matrix} n \\ l \\ r \end{matrix} \right\} C _ CV$ の位置の ə が速い発話では脱落すると書かれている。Porpe によると、語中で子音が三つ続くのはこの場合に限られることになる。
5. Төмөргогоо (1969, 1970) などでは、正規の正書法に基づいている。
6. 正規の正書法では、固有名詞以外の複合語は分かち書きされる。分かち書きをする利点はいろいろあると思われるが、たとえば цаг уур 「天気」の r が摩擦音ではなく閉鎖音（ないしは破擦音）であることを示すのに役立っているといえよう。また、 тийн-ялгал 「格」の n が口蓋化されないことも分かち書きのおかげでわかる。しかし一方、欠点もあって、 цаг уур の r が通常有声音で発音されるとか、 улс төр 「政治」が一語のようなピッチアクセントで発音されるといったようなことは、分かち書きをするとわかりにくくなる。
- 「六」と「自分の絵を」は、正規の正書法では共に зургаа であるが、「六」の場合 r は摩擦音、「自分の絵を」の場合 r は閉鎖音で発音される。この区別は、後者を зураг аа と分かち書きにすると明確になる。正規の正書法では、格語尾は分かち書きしないので、「六」と「自分の絵を」とは同形異音語（且つ異義語）になってしまう。 Төмөргогоо の表記では、後者は зурагаа と綴られることになるので、一応区別ができるように見えるが、 буг 「悪魔」と буга 「鹿」の造格においては、正規の正書法と同様、 бугаар という同形異音語になってしまう。
7. ブリヤート方言では、「心」は сэдьхэл と綴られる。
8. v の後では авбал 「取るなら」のような例がある筈であるが、 Төмөргогоо の辞書には載っていない。 n の後では b となる。 Тэр хэн бэ? 「あの人はだれですか」という例文が хэн 「だれ」の項目のところに載っている。
9. もし、 абч 「取って」、 явж 「行って」のような使い分けがされているのなら、発音に忠実に書き分けたものといえよう。しかし、以下に述べる例から判断する限り、発音を忠実に表しているとはいえないようである。
10. 文語では、次のようになっている。

чабганц	「老婆」	čibaγanča
авгай	「妻」	abayai

ширбэ-	「むちで打つ」	širbe-
арван	「十」	arban

11. たとえば, уншигч「読者」のиは, унш-「読む」, уншлага「読書」ではゼロになる。ブリヤート方言の正書法では, 母音は交替しない。уншагша, унша-, уншалга。
12. албаをалабと綴ると, бが語末にくることになるので困る。また, мөнгөをмөнөгと綴るとнが [ŋ] でなく [n] になるし, гが有声音ではなく無声音になってしまう。ただし, 正規の正書法では, байшинг「建物」のように, 隠れたгを持っている語の対格は, 語末に7子音が二つ並ぶ。
13. 正規の正書法で, 動詞が母音語幹か子音語幹かは, 次のように考えるとよい。

хを取り去った形	語幹	例
A. 長母音, 二重母音	V-	хий-х
B. и		
{ иの前がж, ч, ш	C-	унш-их
{ иの前がж, ч, ш以外	V-	бари-х (барь-)
C. ла, ло, лэ, лө		
{ лの前が長母音, 二重母音	C-	тоол-ох
{ лの前がC ⁷	V-	хэрэглэ-х
{ лの前がC ⁷ C C V (C ⁷) C ⁹	C-	нарийвчил-ах
{ лの前がC ⁹	C-	усл-ах (усал-)
D. C C V		
{ C ⁷ C ⁹ V	C-	өлс-өх
{ C ⁷ p V	C-	амр-ах (амар-)
{ C ⁷ + p 以外のC ⁷ + V	V-	итгэ-х, харва-х
E. V C V	C-	бол-ох, өргөд-өх

14. ブリヤート方言では, ярая, зохёол と綴られる。
15. 母音挿入規則は, 次のように定式化できる。詳細は, 角道 (1974, 1976, 1977) を参照。

$$\phi \rightarrow V / C _ (C^7 \chi C^{9(9)}) \left\{ \begin{array}{l} \# \\ C^{7(7)} V \end{array} \right\}$$

16. 最初から(基底形に)母音を書く位置というのは, 母音挿入規則によって挿入される以外の母音の位置のことである。第一音節の母音, 長母音, 二重母音, 区別する母音, иなどである。第2節で述べるC⁷の直後の母音は, Төмөртгоогоの表記体系において基底母音である。
17. 正規の正書法において, 母音消去は次のように定式化できる。詳細は, Kakudo (1977) を参照。

$$V \rightarrow \phi / V (C^7 \chi C^{9(9)}) _ (C^{7(7)}) + V$$

18. 正規の正書法において, утас「糸」の属格はутасныではなくてутасныである。これは, утасにнが付いてутасанになり, 余分な母音が落ちてутсанになったものにыが付いたと考えると説明ができない。утасにнが付いてутасанになり, 余分な母音はそのままдеыが付き, утасаныとなってから母音消去規則が適用されてутасныとなると考えなければならない。すなわち, утас + н + ыではなく, утас + ныと考えればよいわけである。нのあとにさらに何か付く場合は, нの直後の+を無視するのである。しかし, だからといって, ныを属格の異形態の一つだとみなしているのではなく, нの直後の+は, 母音消去法規則に関してサイクルを成さないと考えるのである。
19. хазгар「びっこの」のгは口蓋垂音である。文語ではqaɣaɣarであるから, Төмөртгоогоでもхазагарとなるべきであるのに, 実際は, хазгарとなっている。したがって, 語中では, 文語の音節構造がそのまま受け継がれていない場合もあることになる。

20. 正規の正書法では、**өлс-ө-нө**「飢える」、**унш-и-на**「読む」などもこの規則に従う。**Төмөртоогоо**ではどうなるのか不明。
21. **шавьж**「昆虫」が**шавжи**とならないのは、語末の **ж, ч, ш** のあとには **и** を書かないためである。**туульчин**「叙事詩の語り手」が **туулчин** でないのは、**тууль + чин** だからである。
22. **арви + га**.「ふやす」と、**горь + д + лого** を比べると、前に子音が二つあると **и**、一つしかないとき **ь** になっているように思われるかもしれないけれども、**сони + рхол**「興味」では、前に一つしか子音がないから、この説明では不十分である。
23. **анги + лал**「分類」については、**и** の前に子音が二つあるので、(**и**) の場合と関係があるといえるかもしれない。

例があまりにも少ないので一般論は下せないが、**-лага, -лого, -маг, -мог** が付くと語幹末は **ь** で、**-гар, -гор** が付くと語幹末は **и** である。

例	урь + лага	「招待」	тарь + лага	「犠牲」
	зорь + лого	「意志の強い」		
	дульмаг	「不完全な」	хольмог	「混合」
	ати + гар	「縮んだ」	они + гор	「細い目をした」

参 考 文 献

- 角道正佳 (1974) 「ハルハ方言の正書法」『日本モンゴル学会會報』第5号、29-36
- 角道正佳 (1976) 「音韻規則と方言 Buriat と Khalkha」大阪外国語大学モンゴル語研究室
- Kakudo, Masayoshi (1977) 'Cyclicity in Phonology.' *Nebulae* Vol. 3, 188-190.
- Лувсандэндэв, А. ed. (1959) Монгол хэл бичгийн зарим асуудал, Шинжлэх Ухаан Дээд Боловсролын Хүрээлэнгийн Эрдэм шинжилгээний хэвлэлийн газар, Улаанбаатар.
- Лувсандорж, Ж. (1975) Монгол авианы дуудлага, Монгол улсын их сургууль Монгол хэлний тэнхим, Улаанбаатар.
- Моомоо, С. (1977) Система фонем современного монгольского языка, Wydawnictwa uniwersytetu warszawskiego.
- Мөөмөө, С. (1979) Орчин монгол хэлний авиан зүй, Улсын хэвлэлийн газар, Улаанбаатар.
- Надмид, Ж. (1968) Монгол хэлний зүй: авиа зүй, зөв бичих дүрэм, БНМАУ Ардын Боловсролын Яамны Хэвлэл.
- Poppe Nikolaus (1951) *Khalkha-mongolische Grammatik*, Franz Steiner Verlag GMBH, Wiesbaden.
- Poppe, Nicholas (1970) *Mongolian Language Handbook*, Center for Applied Linguistics, N. W., Washington, D. C.
- Sanzheyev, G. D. (1973) *The Modern Mongolian Language*, "Nauka" Publishing House, Central Department of Oriental Literature, Moscow.
- Төмөртоого, Д. (1969) 'Монгол бичгийн дурсгалуудад эгшиг авианы ижилсэл уруушил хийгээд хоёр эгшигийн дундах зарим гийгүүлэгчийн сугарлыг тусгасан нь,' Хэл зохиол судлал Tomus 6 Fasc 5, 79-82.
- Төмөртоого, Д. (1970) Монгол хэлний шинжлэлд нэрийн тийн ялгалыг ангилсан нь, Хэл зохиол судлал Tomus 8 Fasc 8, 301-314.
- Төмөртоого, Д. (1977) 'Монгол хэлний *а- *bū- язгуурт үйл үгс, тэдгээрийн ялгал,' 『東京外国語大学論集』27, 347-384.
- トモルトゴウ, D. 著・小沢重男・蓮見治雄編・訳 (1979) 『現代蒙英日辞典』開明書院

1982年10月1日